

## ハンドボール競技の在り方に関する研究

河村 レイ子 大西 武三

### A Study on What Handball should be

Reiko KAWAMURA and Takezo OHNISHI

#### Summary

A purpose of this study is to investigate by means of questionnaire how those who experienced Handball through club or teaching recognize it.

The result is following;

1. They think Handball has a rich quantity of motion and is good for the development of the capacity of basic movement like run, spring and throw.
2. Handball is easy to play so men of health fully enjoy by doing if not require high technic.
3. Handball is very hard sports for women because the act of contact with body is permitted in it.
4. It was found that there were too many violations to judge so many men hoped for improvement of judging method.
5. It was found that 90 percent of all desired there are many Handball's programs of television.
6. It was found that 80 percent of all, especially players of top level, were displeased with the judgement of referee.
7. It was necessary to cultivate leaders for the diffusion of Handball and its right understanding.

ハンドボール競技が日本に紹介されたのは大正11年である。大谷武一氏がアメリカ留学の帰途、終戦間もないドイツを訪れ、そこで盛んに行なわれているハンドボールを見て帰国し、日本体育学会夏季講習会に於て紹介したのが始まりである。

ハンドボールの起源を明確に述べることは大変困難であるが、近代ハンドボール競技に近いものが始められたのは、1900年の初頭ドイツと北歐に於てであった。地域を異にして始められた競技をスポーツとして確立させ、世界的に普及発展の足がかりを作ったのは、ドイツのベルリン大学のカールシェレンツ氏であった。スポーツが普及発展するためにはその競技自体に普及発展させるに値する価値がなければならないが、ハンドボール

を競技として組織体系づけるに際して、カールシェレンツ氏は、次の2つの価値をハンドボールに与えている。<sup>3)</sup>

① 自然性の価値 新鮮な空気のもとで動き回るといふ人間の絶対的本能と合致している。競技の実施や習得に特別な用意が必要でなく健康な人なら誰でも出来る。

② 身体育成の価値 身体育成に関して、ハンドボールで必要とされる走、跳、投を通して、諸器官や筋力が促進される。

これら2つの価値は、体育的に非常に高い価値である。大谷武一氏もその紹介に当って、この体育的価値に大いに着目していることが次のことよりうかがえる。<sup>7)</sup>「手球にも種々の方法があるが、

要するに蹴球の変形であって、フットボールはボールを足で運ぶのに対して、これは手で送るのである。足で運ぶより手で運ぶ方が一層簡易である。それに蹴球では殆ど、脚のみ使用するのに反して、これは脚と同時に腕も使用する。それ故にこれを身体練習法の上から言えば、一層合理的な体育法であるということが出来る。」

世界や日本でハンドボールの普及発展は、体育的な面、特に身体の育成に置かれていたことがうかがえる。

ハンドボールが、学校体育にとり入れられたのは、紹介後間もない大正15年である。大谷武一氏の提唱によって、改正学校体操教授要目に採用されている。以来現在まで、学校体育の一教材として、徐々にではあるが順調に普及されてきている。

学校体育として日本で芽を出したハンドボールは、1940年の東京オリンピックを契機として、スポーツとしても発展の足がかりを得た。東京オリンピックでは、ハンドボール競技は開催種目に設定され、そのための準備は進められた。独立したチームの誕生と、ハンドボール連盟の設立がなされたが、日支事変のため返上され、行なわれなくなった。

しかし、ここに独立したスポーツとして発展の基盤が与えられることとなったのである。ハンドボールは、11人制ハンドボールと、室内で行なわれる7人制ハンドボールとあるが、11人制ハンドボールは戦前にその隆盛期を終え、戦後は7人制ハンドボールが11人制ハンドボールにとって代って盛んになった。

日本では1963年より、7人制に一本化されてきた。

現在日本のハンドボールは、学校体育の教材としても、又スポーツとしても1つの地位を築くまでに至ったが、ハンドボールが、より体育として又スポーツとしての価値を高めていくためには、ハンドボールの現状を認識し、より良いものへと発展させていかなければならない。筆者らは、カールシュレンツ氏が与えた価値や、大谷武一氏がハンドボールを評価したものを十分に認識しているし、又スポーツとしての魅力も十分に理解しているつもりである。しかし、これだけ発展の基盤

が整っていないながら、学校体育としても、スポーツとしても伸び悩んでいるのは、それなりの原因があるからに他ならないと思われる。そこで本研究は、いろいろの層の人々に、ハンドボールに関する質問を行ない、ハンドボールがどのように認識されているのかを調査することによって、ハンドボールの今後の在り方を探ろうとしたものである。

### 研究方法

調査はアンケート調査により行なった。調査内容はハンドボール全般にわたっての印象、ルールと審判、技術、戦術などについての意見をあらかじめ全68項目あげ、それぞれの項目に「はい」「いいえ」のいずれかの回答をうる方法をとった。

調査対象は昭和53年度全日本総合ハンドボール選手権大会出場選手、昭和54年度全国教員養成大学ハンドボール研修会参加者、及び筑波大学(茨城)、東邦大学(千葉)のハンドボール部に所属していない一般の学生である。昭和54年1月と8月に調査を実施した。

調査人員と各群のハンドボール経験年数を表1に示した。回収率は約75%であった。

各群の属性は次のようである。

経験者 実業団、学生でハンドボール経験年数も長い。現在の日本のトップレベルにある者。

教育系参加者 教員養成大学に所属し大学入学後ハンドボールを始めた者も多い。将来は体育やその他の教科の教師となり指導的立場に立つ者が多いと予想される。日頃はハンドボール専門の教師により指導を受ける機会が少ない。

未経験者 クラブの経験はないが授業ではハンドボールの経験がある者と、全くハンドボールの経験がない者。

Table 1. Members who were investigated and years of each group's experience

群	男		女		全体
	人数	経験年数	人数	経験年数	
経験者	45人	8.3年	89人	4.7年	134人
教育系参加者	77人	2.4年	102人	3.0年	179人
未経験者	100人	0~1年	62人	0~1年	162人

結果と考察

1. ハンドボールの印象に関して

表2は、ハンドボールに関する意識調査の結果である。この調査結果からハンドボールが一般的にどのようなとらえられているかを検討してみる

と次のようになる。

1) ハンドボールは見るスポーツかやるスポーツか。体育的な面からみれば、見て面白いだけのスポーツではその価値は少ない。行なうところに体育としての価値があるのだから、行なって面白くなければ、積極的に取り組む教材にハンドボールは

Table 2. Results of investigation into consciousness of Handball

	男 子								女 子							
	経験者 (45)		教育系 参加者 (77)		未経験 者 (100)		全 体 (222)		経験者 (89)		教育系 参加者 (102)		未経験 者 (62)		全 体 (253)	
	Yes	No	Yes	No	Yes	No	Yes	No	Yes	No	Yes	No	Yes	No	Yes	No
見ておもしろいスポーツである	80	18	66	34	47	50	60	38	85	15	85	14	48	47	76	22
やっておもしろいスポーツである	84	16	91	8	72	26	81	18	91	9	92	6	69	26	86	12
シュートがダイナミックである	78	20	79	21	81	17	80	19	98	2	90	10	90	8	93	7
スピーディーである	84	13	84	16	85	15	85	15	97	3	94	6	92	8	95	5
チームプレーが素晴らしい	84	13	82	16	63	34	74	23	93	7	86	13	82	16	88	12
フェアプレーの精神に欠けるプレーが多い	33	67	55	45	43	55	45	54	47	48	55	43	31	65	46	50
迫力があってよい	87	11	86	14	57	31	73	21	94	6	92	8	61	32	85	13
初心者でも十分プレーが楽しめる	44	53	53	46	59	39	54	44	47	49	49	51	32	66	44	54
キビキビとした動きが多い	82	16	87	10	80	19	83	15	90	9	93	7	85	13	90	9
戦術に高度なものがみられない	22	76	22	78	25	69	23	73	17	83	12	87	29	66	18	81
速攻がすばらしい	93	4	86	14	84	13	87	12	96	2	96	4	79	19	92	7
ゴール前での単調な攻撃がつまらない	27	71	38	62	41	56	37	61	26	73	21	78	29	65	25	73
ゴールキーパーとのかけひきがおもしろい	93	4	92	8	74	23	84	14	98	2	90	9	82	13	91	8
激しいスポーツである	93	0	96	4	73	24	85	12	98	1	100	0	90	6	97	2
かなりの体力が必要である	91	7	95	5	77	22	86	13	100	0	98	1	92	5	97	2
男子にも相応きびしいスポーツである	93	4	91	9	82	18	87	12	82	17	83	14	76	19	81	16
粗暴なプレーが多い	38	58	62	38	42	54	48	49	57	42	70	28	44	50	59	38
きたない反則が目立つ	33	64	40	60	34	59	36	60	48	51	48	49	24	69	42	55
けが多いスポーツである	60	38	68	32	41	56	54	44	80	19	81	18	52	42	74	24
反則数に制限がないのがよくない	31	67	30	70	56	42	42	57	18	82	27	73	55	39	31	68
接触プレーが危険である	38	60	49	51	41	56	43	55	62	37	57	42	60	37	60	39
身体接触があっておもしろい	91	7	69	31	74	24	76	23	73	26	57	41	23	74	54	44
審判のルールに対する解釈が統一されていない	84	13	78	21	47	40	65	28	76	21	71	28	35	47	64	30
審判の権限をもっと強くすべきである	84	11	70	30	65	24	71	23	54	45	52	44	52	35	53	46
反則に対してもっと厳しく対処すべきである	84	13	62	38	69	23	70	26	72	28	65	34	56	32	65	32
審判によってゲームが左右され易い	89	9	79	21	55	37	70	26	94	6	78	19	44	44	76	20
攻撃が平面的である	16	82	25	75	37	58	28	69	19	80	24	76	35	61	25	74
ハンドボールの指導者が少ないと思う	93	4	97	3	82	12	90	7	83	16	99	1	85	8	90	8
授業等でハンドボールをやる機会が少ない	78	16	92	8	65	31	77	20	97	3	84	16	66	29	84	15
審判の養成をもっと積極的に行うべきである	96	2	100	0	79	14	90	7	96	3	96	3	69	13	89	6
練習場所が少なすぎる	69	27	86	14	67	30	74	24	52	47	77	23	65	24	65	32
技術的指導講習会などを開いてほしい	91	7	97	3	78	16	87	10	88	11	95	3	53	24	82	8
テレビ等での放映を多くしてほしい	98	0	100	0	80	17	91	8	100	0	98	1	69	26	92	7

なり得ない。又、見て面白さがなければ、スポーツとしての爆発的な発展も望めない。この調査では、双方の項目とも高率を示しているが、やるスポーツとしての項目が、よりまさっていることがわかる。特に男子では、20%の差があり、ハンドボールはどちらかと言えば、見るより行うスポーツであると認識されている。経験年数別にみると、男女とも経験年数が高くなるにつれて、その率は高くなっている傾向にある。

#### 2) 技術、戦術について

ハンドボールの特性を競技の面からみるとその1つは、シュートの場面にあると言える。ディフェンスやゴールキーパーを交わしながら、全力で走り、跳び、投げる場面はハンドボール独自のものである。シュートの場面の項目に対する率は、非常に高いものがある。「シュートがダイナミックである」「ゴールキーパーとのかけひきが面白い」は高い率を示しており、ハンドボールを行なう者が、シュートの場面に関心と興味を抱いていることがうかがえる。

ハンドボールは、人間の最も器用である手を扱って、手ごろな大きさのボールを操作することから、ゲームの様相は、スピーディーでテクニカルなものとなる。従って「スピーディーである」「チームプレーが素晴らしい」「キビキビとした動きが多い」「速攻が素晴らしい」の項目に高い率となって表われているのは推察にたやすいことである。しかしゲームのマイナス的な要因である「攻撃が平面的である」「戦術に高度なものが見られない」「ゴール前での単調な攻撃がつまらない」の項目は、全体的には思ったより低い率であった。しかし経験年数が少なくなるに従って、率は高くなる傾向にあり、取り組みの浅い人ほど、マイナス要因の印象を強く持っていることがわかる。

#### 3) 体力面について

ハンドボールは、体力や運動能力の養成に向いているスポーツであることは、競技の形態を見て明らかである。「激しいスポーツである」「かなりの体力が必要である」「男子にも相当きびしいスポーツである」の項目は非常に高い率を示している。特に女子は高い率を示している。このことは、短時間に行う体育の授業においては、相当な効果

が期待できる反面、レクリエーションや、生涯体育としては、体力的に厳しすぎるきらいのあることがうかがえる。

#### 4) ルール、審判について

競技は、そのルールによって規定されているものであるが、ハンドボールの特色の1つに、「相手がボールを持っていなくてもからだで阻止することはよい」とされているルールがある。従って身体接触はしばしばゲームの中で行なわれることになる。特にゴールエリアライン前では、敵、味方がゴールをめぐる、入り混じって攻防するために、頻繁に身体接触が起る。この身体接触について「面白い」とするものは、男子では非常に高い率で支持されていることがわかる。女子では経験年数が低くなるに従って、率が低下しており、特に未経験者では、非常に低い率になっている。その反対に「接触プレーが危険である」とする者が、かなりの率で現われている。ハンドボール競技は、ゴール前の混戦が、ひとつの特徴となっているが、身体接触の反則を1回1回レフェリーが笛を吹いて止めていては、かえって反則している方に有利となることがあるので、審判はアドバンテージのルールを適用することによって、オフense側を不利にさせないようにしている。即ちルールに次のようなものが定められている。「レフェリーはフリースローの判定をすることによって、規則に違反しているチームが有利になるような時には、フリースローの判定をしてはならない」「反則があっても攻撃側プレーヤーが充分にからだをボールを操作できる状態ならば、フリースローの判定をしてはならない」とある。技術レベルが初歩的な段階では、身体接触の反則は少なく、又反則されれば技術の未熟さのために、オフense側に不利になるので、アドバンテージの適用を受けることは少ないが、技術が高度化してくると、少少の身体接触の反則が起ってもその状態のままプレーを継続した方が、オフense側が有利に試合を展開できるので、アドバンテージの適用を受けることが多い。そのような場面を一般的な人を見ると、ルール違反が公然と行なわれていると解釈することも多いようである。「フェアプレーの精神に欠けるプレーが多い」「粗暴なプレーが目立

つ」「けがの多いスポーツである」という項目にかなりの率が示されている。特に男女の教育系参加者や、男子の未経験者、女子の経験者に高い率が示されているので、これらの印象をなくさせる審判法が望まれる。ゲームは審判によって運営管理されるのであるが、ハンドボールにはアドバンテージのルールがあり、又しばしば身体接触の反則が起るので、審判の判定は非常にむずかしいものとなる。特に技術が高度になればなる程むずかしくなる。「審判のルールに対する解釈が統一されていない」「審判の権限をもっと強くすべきである」「反則に対してもっと厳しく対処すべきである」「審判によってゲームが左右されやすい」などの項目は、高い率を表わしている。特に男女とも経験年数が多くなり、トップレベルで勝敗を競っている者ほど比率が高くなっているのは、アドバンテージのルールや、身体接触の見極めがむずかしいことから当然のことであろうが、一般の人にルールの解釈に誤解を与えないためにも又、高度なレベルでゲームを行なっている人にも、はっきりとした規準で、誰にでもわかり良い審判法を今後していくことが望まれる。

#### 5) 普及面について

ハンドボールがスポーツとして、又学校体育の中で受け入れられる基盤を整えるためには、種々の施策が必要である。ハンドボール普及の施策がなされていないことは、次にあげる項目が非常に高率で示されていることからもうかがえる。「ハンドボールの指導者が少ないと思う」「授業等でハンドボールをやる機会が少ない」「審判の養成をもっと積極的に行なうべきである」「練習場所が少なすぎる」「技術指導講習会などを開いてほしい」「テレビ等での放映を多くしてほしい」などである。

#### 2. 各群の特徴

ここではハンドボール経験年数の異なる3つの群の、ハンドボールに対するとらえ方の相違を見ることにする。

##### 1) 経験者群

経験者群は、80~90%の者がハンドボールを、「かなりの体力を要するが魅力あるチームスポーツである」と考えており、審判の判定については

80%近くの者が不満を感じているようであった。

##### 2) 教育系参加者群

次に教育系参加者群の特長としては、反則に關するもの、指導者や練習場所や練習仲間や講習会、マスコミ対策などのハンドボールをとりまく環境に対しての不備を訴えた者が経験者群を上回っていた。また平常指導者の助言を受ける機会の少ないこの群が、ラフプレーに関する項目の値も高かった。ハンドボールの経験年数は少ないが、ハンドボールに対する興味は十分に持ち、その体育的効果も認めており、普及に関してはトップレベルにある経験者以上に強い欲求を持っていると言っよういだろう。

##### 3) 未経験者群

未経験者群はハンドボールをスポーツ全体の中かの一種目としてとらえ、その長所短所について巾広い見解を示しているようである。この群で他の群より高い比率を示したのは、「サッカーなどに比べてスケールが小さい」「攻防がはっきりしていて意外性に欠ける」「反則数に制限がないのがよくない」などの意見であった。

##### 4) 男女差

次に男女の違いについて検討してみると、女子に多かったのは、「チームプレーが素晴らしい」、「けがの多いスポーツである」「激しいスポーツである」「かなりの体力が必要である」、「接触プレーが危険である」などの反則やラフプレー、体力に関するものであった。男子に多かったのは、「身体接触があって面白い」「審判の権限をもっと強くすべきである」、「中盤のおもしろみがない」「もっと大会を多く開いて欲しい」などであり、女子ほど体力面の影響を受けることはないようであった。男子は攻撃的、積極的、女子は協調的、消極的な傾向がみられ、男女の特性がハンドボールに対する意識の違いにもあらわれていた。

##### 4. ハンドボール入部動機について

学生のスポーツ種目に対する反応プロセスのパターンを調査した松田ら<sup>1)</sup>の報告によると、ハンドボールはⅡ型のカリキュラム延長型に含まれ、知識率と活動率が他より高く、欲求率が低いものの中に含まれている。中高等学校時代に履習した種目に多く、ソフトボールや軟式テニス、剣道な

Table 3. Motivations of joining a club

	男 子		女 子		全 体	
	(77)		(102)		(179)	
	n	%	n	%	n	%
教師・友人・先輩などの勧めで	18	23.4	29	28.4	47	26.3
面白そうだ、興味が湧いた	15	19.5	20	19.6	35	20.0
これまでと違うスポーツ	2	2.6	5	4.9	7	3.9
学校中で一番強いクラブ	0	0	6	5.9	6	3.4
クラブの奮闘気が良かった	0	0	4	3.9	4	2.2
何でもいからスポーツがやりたかった	2	2.6	6	5.9	8	4.5
チームプレーがやりたかった	1	1.3	5	4.9	6	3.4
他競技に限界を感じて	3	3.9	4	3.9	7	3.9
初心者でもやれると思った	1	1.3	5	4.9	6	3.4
授業で経験して面白かった	1	1.3	5	4.9	6	3.4
スピーディーでシュートに魅力がある	2	2.6	0	0	2	1.1
変化に富む	1	1.3	0	0	1	0.55
なんとなく	5	6.5	0	0	5	2.8

どが含まれていた。

ここでは教員養成大学ハンドボール研修会に参加した学生について入部の動機を調査した。ハンドボールを始めるに至った動機にはいくつかの要因があげられると思うが、その中から一つだけ記述させたものである。回答数としてはやや少ないが、表3のような結果であった。

これを要約してみると、ハンドボールを始めることとなったきっかけは、ハンドボールとは限らないが、何か運動をやってみたいと思っていた時、これまであまり経験したことの無い未知のスポーツであるハンドボールを目にする機会があった。これなら初心者も多いし、自分にも何とか出来そうだと思う、また周囲の人からの勧めもあり入部をした、といったパターンが多いようである。

より多くの者がハンドボールに接することの出来る環境を整えてやるのが、ハンドボールの普及の面でも大切なように思えた。ハンドボールは青少年の満ちあふれる活動欲求を満たすのに十分な競技なのである。

### 要約

本研究はクラブ活動や授業などで、ハンドボールを実施したことのある青少年を対象に調査を行ったものであるが、その結果、ハンドボールが以下のように認識されていることがわかった。

1. ハンドボールは運動量も豊富であり、走、跳、投の基礎的運動能力の養成に適したスポーツであるとみなされている。
2. 競技を実施するのに、特別な用意が必要でなく、技術の程度を問わなければ、健康な人なら十分に楽しめるスポーツである。
3. ハンドボールは身体接触プレーが許されているため、女子にとっては相当ハードなスポーツと感じられている。
4. 必要以上の反則が多く、審判法の改善を望む人が多いことがわかった。
5. 全体の9割以上の者が、テレビ等での放映を多くして欲しいと望んでいることがわかった。

6. 審判の判定に対する不満が、特にトップレベルの競技者に多く、8割以上もあった。
7. ハンドボールの正しい理解や普及のためにも、指導者の養成が必要である。

#### 参 考 文 献

- 1) 松田義幸他；精神的データシステムの開発. 日本体育学会第30回大会号, p. 644, 1979.
- 2) 的場益雄；中高等学校体育シリーズ. ハンドボール 泰流社 p. 7~13, 1973.
- 3) 水上一；ドイツにおける近代ハンドボール競技前史 日本ハンドボール協会発行機関誌 p. 24~25, No. 176, 1979.
- 4) 日本ハンドボール協会；ハンドボール競技規則, 昭和53年度版, 中央印刷 K.K., p. 1, 22, 42, 1978.
- 5) 日本ハンドボール協会普及指導委員会編；ハンドボールテキスト. 広研印刷 K.K., p. 2~5, 64~67. 1978.
- 6) 丹羽劭昭他；女子大生のスポーツ参加の動機に関する因子分析的研究 体育学研究第24巻第1号, p. 25~38, 1979.
- 7) 大谷武一；体育の諸問題 目黒書店 p.19, 1924.
- 8) 高嶋冽；ハンドボール技術と作戦 杏林書院 p. 16~21. 1971.
- 9) 渡辺慶寿他；実戦ハンドボール 大修館 p. 264~265, 1977.